5

日本とアジアの芸能ネットワークづくり -----オンライン芸能村

0

現代における伝統音楽・芸能

2020年度「日本とアジアの伝統音楽・芸能のためのアートマネジメント人材育成事業」(以後,「AM事業」)では、日本やアジアの伝統音楽・芸能を「現代」の視点で考え、現代社会とどのように取り結ぶかを課題としました。さまざまな劇場・博物館の関係者、音楽・芸能の担い手たちによる「基礎講座」、「実践セミナー」、「企画制作研修」では、受講生の方々とともに、①伝統を現代に生かす舞台制作、②担い手、企画者、研究者などのネットワーク作り、③映像を活用した新しい表現を扱いました。「オンライン芸能村」(以下、「芸能村」)は、上記②の活動の具体的な場のことです(東京音楽大学アートマネジメント人材育成2020年度企画 B-1 2021)。

本稿では、伝統音楽・芸能における「現代」の 意味を考えつつ、芸能村の実践、成果、今後の発 展を簡単に報告します。芸能村の実践を簡潔にま とめれば、「遠くをつなぐ」と「舞台以外の表現 の場」の2点だと思います。

2

COVID-19と伝統音楽・芸能

2020年2月頃より顕在化した新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響を大きく受け、表現活動一般の環境が大きく変化しました。

オンラインに対応した表現形式の開発や、ビジネスにおけるテレワーク活用は、当初は半ば強制されたものとして、決して肯定的には受け止められませんでした。オンライン会議ツールの利用は、多くの人々にとり初めての経験だったからです。しかし、ネガティブな面だけではありません。当初の「やらされ感」を脱し、これらの中から「新しい表現の可能性」の発見や、「ライフワークバランスの実現」への気づきもありまし

た。困難を乗り越え、新たな価値を生み出すこと こそ、必要なことに思われました。

実際に、音楽・演劇・古典芸能などの表現分野で「進化した」試みが行われました。また芸能村のオンライン実践の知見は、筆者が関係したルーマニアと日本を結んだオンライン公開講座1)にも活かされました。また芸能村の講師神野知恵氏も、芸能村の手法を発展させています2)。

3

5 リアルワールドの価値

COVID-19 は別にして、現代社会における大きな変化の1つは、新しいメディアの登場でしょう。「音声の時代」や「映像の時代」であった20世紀には、レコードやCDなどの録音物や映像の視聴が可能になりました。海外のものも過去に演じられたものも、時空を超えてメディアを通じて見ることができるようになりました。

パーソナルコンピューターやインターネットを 代表とするICT技術も、人々の生活全体を大きく 変えました。すでに、インターネットに常時接続 した携帯端末による映像視聴は、生活の中に定着 しています。

こうした情報環境にいる私たちにとり,「リアルワールド」で演者の息遣いと身体,歌や演奏の精緻なニュアンスに直接触れ感じることが,「もっとも贅沢で価値あること」になっているとも言えます。実時間と実空間の共有にこそ,高い価値が与えられる時代なのです。



オンライン芸能村へ

ただ、リアルワールドで演じられる伝統音楽・ 芸能の価値が現代社会の中で十分に認められ広く 受容されているかには、疑問符が付くかもしれま せん。明治時代から大きく進展した西洋文化移入 と「近代化」、戦後から高度経済成長期における 生活様式と産業構造の大きな変化により、伝統音楽・芸能への旧来のまなざしは大きく変化しました。公教育カリキュラムでは、日本や世界各地の音楽・芸能を扱う内容も格段に増えましたが、西洋音楽を中心に置きその他を周縁に位置づけるコンセプトからは脱していないように思われます。

日本の伝統音楽・芸能は、地域の「~保存会」により演じられ、また地域を越えた「全国民俗芸能大会」3)などの舞台でも上演されます。重要な「民俗文化財」の価値を守り啓蒙するとの意図の下で、施策が講じられ実践されています。しかし本来は、伝統音楽・芸能を現代の社会状況にマッチさせながら、伝統の維持と同時代性への対応を両立させ、多様な人々がこれらに関わるしくみを作る必要があると思います。

私たちの芸能村ではその一方策として、伝統音 楽・芸能を舞台での上演から解放し、これらを社 会に伝える「つなぎ手」を見つけ、さまざまな試 みを企画しました。担い手たち,公的文化行政機 関, 劇場の企画制作者, 教員, 研究者, 市民をつ なぐネットワークを構築して、広くアジアや日本 の伝統音楽・芸能の価値を楽しみ広めることを目 指しました。2020年度 AM 事業の総括文書では、 芸能村企画を,「オンライン上で様々な地域や文 化の異なる芸能及び芸能に関わる人々との出会い の場を提供し、継続的な関係づくりと新たな芸能 の場の創出方法を検討することを目的とした」4) としています。受講生・講師・事業スタッフがひ とつの「村」を構成し、全員が「村人」として、 村内でのネットワークづくりとコミュニケーショ ンに参加しました。

(1) オンラインフィールドワーク

フィールドワークは、地域の音楽・芸能に触れ、楽しみ、理解するための重要な方法です。西洋音楽(クラッシック音楽)の場合も、欧州での音楽実践に直接触れることが、音楽に「真に迫る」方法であることに疑問の余地はないでしょう。近年は海外から多くの演奏者が来日し、世界

のさまざまなものに触れることができますが,こうした公演は現地での音楽・芸能体験とは異なるものです。音楽・芸能は,基本的にはそれが奏演される場とその歴史に結び付いて存在する「ローカル」な存在だからです。情報ネットワーク上に「漂流する」音楽・芸能の視聴は,フィールド体験とは大きく異なります。

さて、ここで言うフィールドワークは、外部者が内部者の行う音楽・芸能を一方的に理解するような活動ではありません。実践の場に直接に触れ、その担い手たちと交流する中で、外部者たるフィールドワーカーと担い手たちが協働する行為のことです。外部者と内部者は、そのふれ合いの中で、相互に影響を与え合います。芸能村第1回のオンライン(Zoom)集会(2020年9月12日)の講義で、講師の神野知恵は民俗芸能、地域文化や芸術をつなぐ要素として「人付き合い」の重要さを指摘して、「内輪の外輪を広げる」と表現しました(神野 2020)。

今回,芸能村の村人はほとんどがオンラインで 集まり,さまざまな実験やディスカッションを行いました。村人の住まいも,沖縄県,岡山県,徳 島県,大阪府,奈良県,宮城県,関東圏,ニュー ヨークなど多様で,オンラインで拡がる人の輪と なりました。

芸能村村人は、現地に直接出向くことなく現地の様子に触れる「オンラインフィールドワーク」も試みました。第2回オンライン集会(2020年9月19日)では、韓国・高敞(コチャン)在住の伝統音楽家イ・ソンス氏がオンラインで高敞農楽伝授館の中を案内し、参加した村人とのQ&Aセッションに応じ、伝統楽器チャンゴの演奏を行いました。韓国、日本各地、北米がオンラインでつながったこのセッションでは、情報環境の大きな変化が実感されました。Zoomによる太鼓演奏では、音がうまく聞こえないなどの技術的問題が顕在化しましたが、これもオンラインツールでの音楽・芸能の扱い方を学ぶ良い機会でした。

ただ、こうした形のフィールドワークが実現で

きたのは、担い手と研究者(学び手)がこれまで に留学・フィールドワークで直接に交流を持って いたからに他なりません。担い手と外部者が突然 オンラインでつながってフィールドワークが成立 することはほとんどないでしょう。日本でもアジ アでも、伝統音楽・芸能の担い手側のICTスキル の欠如などの問題もあるでしょう。ただ、個人と して研究のために現地に入ることが多い音楽・芸 能フィールドワークを振り返れば、オンライン ツールの援用により、多様な視点から担い手とふ れ合う機会を生み出せるように思います。場合に 応じて、リアルとオンラインを組み合わせた フィールドワークも有効ではないでしょうか。

イベント企画では、通常は企画者が事前に入手できる情報が少ないケースが多いと思いますが、このようなオンラインツールを研究者との協働により活用することで、地域の音楽・芸能をその文脈までも理解できる機会になることと思います。

(2) 外部者として隣人になる

芸能村には、特定の地域に外から移住した村人が複数います。都会から地方への移住者です。コロナ禍で地方への移住が増えている現象がありますが、「移住」は現代におけるさまざまな伝統音楽・芸能を考える際の1つのキーワードかもしれません。世界のどこかの地域の伝統音楽・芸能に、移住をきっかけとして外部者が興味を持ち始める事例は多くあります。外から来た者が地域の伝統文化の価値に気付き、その伝承や継承に一肌脱いで、なにかしらの関わりを持つ事例も存在します。

第3回(2020年9月26日)オンライン集会では、ゲスト講師の土生裕氏が、東京から岡山に「地域おこし協力隊」5の隊員として移住し、現地の音楽《長蔵音頭》の再興を行った事例について紹介しました。それに対し、大阪から徳島、愛知から岩手、東京から福岡への移住で、地域の伝統文化や音楽実践の価値を見出した芸能村村人たちが各々の体験を共有しました。決して内部者にはなれないけれど、まったくの外部者でもない存在

として、やさしく現地の伝統音楽・芸能を見守り、その価値を発信したいと思う受講生の姿がありました。人口減少と過疎化を通じて地域の担い手が少なくなる中、こうした人々が地方文化の伝承に手を差し伸べられる可能性を見出しました。 実際、芸能村の企画制作研修の場面では、村人たちの映像制作やワークショップが企画・実践され、さまざまな可能性が広がることを実感しました。

(3) 異なるジャンルの出会い

第4回(2020年10月3日)のオンライン集会では、本学池袋キャンパスから神野氏と韓国太鼓奏者のチェ・ジェチョル氏による韓国の門付け(メックッ)、韓国からイム・スンファン氏による歌の披露、青ヶ島からは荒井智史氏による還住太鼓の実演と体験講座が中継され、日本各地の村人たちが共に楽しみました。各地の伝統音楽・芸能をオンラインでつなぐ新たな試みでした。リアルワールドでは交わることの少ない伝統文化の担い手たちが、専門研究者やアートマネジメント関係者と集い、情報交換をする絶好のネットワーキングの場となりました。お互いの文化が刺激し合い、新たな「創作」につながることも期待されます。

リアルな場での交流が望ましいのは当然ですが、経費などを最小限にしながらオンラインで交流を深める機会を持つことは、企画制作を進行する上でも試みるべき方法ではないかと思います。オンラインツールでの音楽配信については、芸能村講師の姫田蘭氏のご努力と研究により解決されました。こうしたオンラインでの実践手法に対する知見が得られたことは、大きな成果でした。

(4) 受講生の成果

次に、芸能村村人たちの制作した企画を紹介します。その内容は、中間発表会(2021年1月23日)と最終発表会(2021年3月20日)で、村人や芸能関係者に共有されました。その6点の成果物は芸能村ウェブサイトで見ることができます。

1. 「山村の芸能 ~ライフストーリーの一場面と

して~」は、村誌には記録されない徳島県のある 農村舞台のストーリーをインタビューで掘り起こ す企画です。美しい写真も魅力的です。

2.「日本語教室番外編 カラダで知るニッポン」は、岡山県で日本語教室に通う外国人技能実習生に、佐賀県の鉦を使う郷土芸能「鉦浮立」の担い手が、オンラインでその演奏を教えるワークショップです。実習生は、自国の文化との共通性にも気づき、日本文化の理解を深めました。

3.「三匹が行く~金津流石関獅子躍の生まれた ところと、今、躍ること~」は、岩手県に伝わる 「金津流石関獅子躍」の担い手へのインタビュー を含めたオンライン勉強会です。

4.「灯台もと暮らし」では、岡山県の伝統芸能「唐子踊」を隣人外部者として取材し、この芸能をこれから誰が担っていくのかについて問いかける映像作品が制作されました。

5.「ようわからんが、ようできた」は、岐阜県の民俗行事「外津汲の山の講」の映像記録です。 コロナ禍で予定外の行事を取材しましたが、地域の人々との新たな交流が生まれました。

6.「とちラボ 土地の記憶 Laboratory」は、担い手を含めた関係者をつなぐためのプラットフォーム案です。グルメ予約サイトのように、担い手や関係者が伝統音楽・芸能情報を掲載し、検索するシステムの企画案です。

5 今後の発展

さまざまな伝統音楽・芸能の魅力に気付く人々をどのように増やせるか。加えて、そうした魅力を発信できる場を作ることが重要に思えます。オンラインフィールドワークを活用したワークショップや、映像などによる発信により、舞台からは見えない担い手たちの生活や芸能に対する想いなどを広く伝えることも可能でしょう。これらが海外を含めて多様な人々の目に留まることで、良い「化学反応」が起き、創造的な試みが生まれることを期待したいと思います。

行政では、「シビックテック Civic Tech | 6) での

問題解決手法が注目されています。こうした手法 も取り入れて,デジタル技術の利用で情報,資金 や人を集めることも試みる必要がありそうです。

人々の様々な形の交流をファシリテートし、伝統芸能を内輪から外輪に拡げるための実践を支援するアートマネージャーが多く生まれることを期待したいと思います。

- 1) 「パンフルートの贈り物 ~ルーマニアの風に乗せて ~」http://www.minken1975.com/course_exhibition/ 20201105.html 参照のこと。
- 2) 科学未来館「対話イベント 人が「集う」ことの価値ってなんだろう? ~人文知コミュニケーターと一緒に考える未来の社会~」2021.9.23

国際交流基金アジアセンター2021 年度事業「多文化共生プロジェクト 2021 郷土芸能オンラインワークショッププロジェクト カラダでつなぐ、ASIA」ほか

- 3) 日本青年館 . N.D. 全国民俗芸能大会の開催 . 日本青年館 . https://nippon-seinenkan.or.jp/seinenkan/minzoku-3/を参照のこと。(2021.11.25)
- 4) 東京音楽大学 日本とアジアの伝統音楽・芸能のための アートマネジメント人材育成事業. 2020. 5-4 自己評価 (活動内容) Ⅱ実践セミナー. 5-4 自己評価書 (2020 年 3 月 14 日付).
- 5) 総務省自治行政局地域自立応援課の「地域力の創造・地方の再生」事業の1つ。https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/02gyosei08_0300066.html を参照のこと。
- 6) 日本のデジタル庁なども推進する,社会課題を「市民 の力×テクノロジー」で解決する手法。https://digitalgov.note.jp/n/nld3a173a8393 を参照のこと。

【参考文献】

神野, 知恵. 2020. 2020 年 東京音楽大学 実践セミナー オンライン芸能村 日本とアジアの芸能ネットワークづ くり (未公刊).

東京音楽大学 アートマネジメント人材育成 2020 年度企 画 B-1. 2021. オンライン芸能村. https://www.tokyoondai.ac.jp/art_management/2020_advance.html (2021.11.25)

(小日向英俊, 執筆協力:神野知恵)